

## 「主イエスの系図」

2015年05月05日

ルカによる福音書 3章23節～38節。イエスが宣教を始められたときはおよそ三十歳であった。イエスはヨセフの子とされていた。ヨセフはエリの子、それからさかのぼると、マタト、レビ、メルキ、ヤナイ、ヨセフ、マタティア、アモス、ナウム、エスリ、ナガイ、マハト、マタティア、セメイン、ヨセク、ヨダ、ヨハナン、レサ、ゼルバベル、シャルティエル、ネリ、メルキ、アディ、コサム、エルマダム、エル、ヨシュア、エリエゼル、ヨリム、マタト、レビ、シメオン、ユダ、ヨセフ、ヨナム、エリアキム、メレア、メンナ、マタタ、ナタン、ダビデ、エッサイ、オベド、ボアズ、サラ、ナフション、アミナダブ、アドミン、アルニ、ヘツロン、ペレツ、ユダ、ヤコブ、イサク、アブラハム、テラ、ナホル、セルグ、レウ、ペレグ、エベル、シェラ、カイナム、アルパクシャド、セム、ノア、レメク、メトシェラ、エノク、イエレド、マハラルエル、ケナン、エノシュ、セト、アダム。そして神に至る。

主イエスの系図が書かれている。神話の人物の名前まで書いているから、創作されたものである。イスラエルにおいては、系図は大切なものであった。自分が誰であるかを言う場合、氏素性を明らかにするため「〇〇族の〇〇の子〇〇」と名乗っている。

ルカ福音書は主イエスの系図を著す時、まず「イエスが宣教を始められたときはおよそ三十歳であった」と記している。主イエスが神の国の宣教を始められた時の年齢は分かっていないが、この記述から、30歳が常識になっている。そして「イエスはヨセフの子とされていた」と続いている。マタイ福音書1章20節に、マリアと許嫁であったヨセフに天使が夢に現れ「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである」と告げたと書かれている。ルカ福音書は、おとめマリアからイエスは誕生したと書かれている。そうすると、ヨセフとイエスは血筋において親子の関係がないことになる。これらの記述は、人間の自然的関係を超えたキリストに対する信仰が生み出した告白である。そして、イスラエルの伝統において、救い主はダビデの子でなければならなかった。だから、ダビデの血を引くヨセフの子と位置づけている。

主イエスは肉を持って生きた歴史的な人物であるから、実の父親がいるはずで、二つの説がある。一つは、イエスはマリアが結婚前に生んだヨセフの子であるという分かり易い説である。もう一つは、マリアがローマ兵の強姦によって妊娠したという説である。ガラヤはローマ支配に抵抗する騒乱が多発した。他の地域より、ローマ兵が多く駐屯していた。そのローマ兵の子であると想像する訳である。そうすると、イエスはダブルということになる。差別と闘った主イエスはこのダブル性から来ていると理解すると、納得できると主張する。この議論はさして意味がない。ナザレのイエスをキリストと信じているので、聖霊によって、おとめマリアより生まれたという告白をそのまま受け入れてよい。主イエスの降誕は永遠が時間に触れたことで、自然的関係の断絶を認めることだからである。

マタイ福音書はアブラハムから下って、14代を三つに区切ってキリストまでの系図を書いている。ルカ福音書は逆に、ヨセフからさかのぼりダビデを経由して、神話のアダム、「そして神に至る」と書いている。聖書では、創造者と被造物は歴然と区別されているが、ルカ福音書は、イエスの父とされるヨセフの系図を神に至ると続けている。これに関しては、大いに不満である。